映画評

一般

『バンコクナイツ』

２０１６年　空族
日・仏・タイ・ラオス　１８２分
監督　富田克也
脚本　相澤虎之助、富田克也
出演　スペンシャ・ボンコン、富田克也、伊藤仁

中村藤生　スタッフ

映画制作から配給までを貫くスタイルに拘って２０年になる空族が、地元甲府を出てアジアのタイ・ラオスで撮った映画。これまでとどう変わったか期待して今年５月に観た。

以前の映画で印象深くけれんみのない『サウダーヂ』２０１１空族・富田克也監督（１６７分）とあわせながら辿ってみる。サウダーヂは空洞化が進む地方都市甲府で不況の中、やりばのない外国人労働者、土木労働者達をドキュメントタッチで描く。なかでも実在の日本人ＨＩＰＨＯＰグループリーダー猛が登場するところからラストの外国人ＨＩＰＨＯＰグループリーダーをナイフで殺傷、自首する場面は、猛がライブする場面と合わせて心に残る。説明くささがないのがいい。ＨＩＰＨＯＰの詞は基本、即興で吐き出すがごとく謳うと聞く。

『バンコクナイツ』はタイ バンコクの日本人専門の歓楽街「タニヤ」を舞台に漂っている危うい日本人の生態が娼婦とのからみで流れる。主人公のラック達出稼ぎの若い娼婦は割り切った感じ。母性社会の東南アジアからくるものなのか。

ラックのひも伊藤仁（空族映画の常連）とのからみも、ラックの心情は迫って来ない。ラックの５年前の恋人だった男オザワがタニヤの店に現れる。ここからロードムービー的に二人は北へ向かう。オザワとラックは彼女の家族が住む故郷ノンカイへ。家族はラックの仕送りを頼りに生きている。祖母、母親、妹、腹違いの弟。そして村人が説明的に描かれる。ラックが胸に抱えるものにもっと肉薄すれば、オザワとのからみが深くなるだろう。ラックが胸に抱えるものは、母性的社会というだけでは軽すぎる。家族との軋轢はこの映画の中では重要だと思う。

一方オザワは一人タイ北東部イサーンからラオス国境付近を彷徨するが、風景が単なる旅行記的描写で感じるものが薄い。ベトナム戦争爆撃痕のクレーターの俯瞰撮影も然り。

『サウダーヂ』にあった内から湧き出る視点がない。結論を出してくる映画ではないが、アジアへ出て映画を撮る思いはどこにあるのか。これまでの空族が重ねてきた時間から絞りだしてくるものがあるはずだ。ラックの元彼オザワを富田監督自ら演じているが、苦しい。メインの役柄であるから役者をキャストしてほしい。次に撮る映画が勝負になる。今一度期待したい。

少し話がずれるが書き綴っていて、ふと柳町光男監督の『さらば愛しき大地』が根津甚八と共に憶い出された。茨城を舞台にどうしようもない人間たちをくろぐろと描いた映画を。甚八は富田と同じ山梨県人。それと若尾文子、増村保造も同県人。

『夜空はいつでも最高密度の青色だ』安井　文　謎の美女

２０１７年　東京テアトル・リトルモア　１０８分
監督　石井裕也
脚本　石井裕也
出演　石橋静河、池松壮亮

今一番、新作を心待ちにしている池松壮亮さんが主演だと知り、楽しみにしていた作品。石橋凌、原田美枝子夫妻の娘である石橋静河さんの初主演作品で、彼女とダブル主演となる。

『舟を編む』『ぼくたちの家族』の石井裕也監督が、最年少で中原中也賞を受賞した詩人、最果タヒさんの同名詩集を原作に脚本を書いたということも、この作品に惹かれた理由の一つだった。

詩集から物語を作る。それはとても魅力的な作業に思えた。そこから生まれた物語は、二人の男女が出会うボーイ・ミーツ・ガールもの。よくある物語。でも、数あるそういう作品とは感触はまるで違っていた。

美香（石橋静河）と慎二（池松壮亮）の周りにはたくさんの人が生きているということを強く意識させられるからだ。たくさんの人たちの中で何度も奇跡的に出会う二人。それを運命とときめくほど、彼らはキラキラした人生を歩んではいない。少しずつ距離を縮める二人の生活には、常にたくさんの人間の呼吸が感じられる。彼らもまたその中の一人であることを何度も強く意識することになり、私は切なくなった。渋谷・新宿のゲリラ撮影がこういう効果をもたらすのか。

何度も繰り返される陳腐すぎるほどのエピソードが、ラストで強烈に生きてくる。それがエンドロールのその先までず

っと残っていて、今も心の中でリフレインしている。その余韻をもう一度味わいたくて、私は再度、映画館に足を運んだ。この作品は、観れば観るほど、心になじんでくるのではないかと思う。そして私は、この先何度もこの作品を観たくなるだろう。

『人情噺の福団治』

水野圭次郎　菰野ふるさと映画塾ＯＢ

２０１６年　グループ現代７１分
監督：伊藤有紀

四日市出身の落語家「桂福団治」。その名を知る四日市人はよほどの落語好きか、年齢の高い方々ではないかと思う。かくいう私も全く名前を知らなかった。

この映画の監督は桑名市多度町出身の伊藤有紀さん。６月２４日から本作が名古屋のシネマスコーレで上映されることとなり、ひょんなきっかけで伊藤監督御本人から前売券を売ってもらえることになった。後日、監督には桑名のむぎカフェのむぎのえいが部（毎月第２土曜１９時から開催）にお越しいただき、本作の紹介と撮影のこぼれ話などをお聞きすることができた。

伊藤監督は学生時代から落語好きで、落語研究会に所属していたこともあり、時間ができると寄席通いをされていたそうである。その後、テレビ番組や映画の助監督やフリーのディレクターをしながらも、いつか落語の映画を撮ってみたいと思っていたところ、ある方から桂福団治師匠を紹介していただき、トントン拍子で映画を撮影することに

なったそうである。約1年半もの間、師匠にじっくり密着し撮影を続け、半ば弟子のような形になってしまったので映画にしたくてもどうしても遠慮してしまう部分もあったそうだが、1日や2日取材しただけのドキュメンタリーとは明らかに違い、本作では深くしっかりと一人の芸人の人間模様が描き出されている。

福団治師匠は同世代や後輩の落語家が頭角を現し始め、まさに自分も時流に乗りかかった時にポリープで声が出なくなり、つかみかけた成功への道が遠のいてしまう。幸い治療と手術の甲斐があって声を取り戻す。退院後、声が出なかった時の経験を生かして手話落語を編み出し、聴覚や視覚に障害を持った人々へ落語を演ずる道を開いて行くことになった。

プライベートでは可愛がっていた次男を病気で亡くし、長男とは考え方の違いで確執が起こるが、昔ながらの芸人気質でなかなか歩み寄れない。奥さんが足を骨折し入院すると、人任せにせず毎日病院に介護に訪れるなどとても優しい一面も見ることができた。また、周りを囲むスタッフ、弟子、友人の暖かさが際立っており、師匠の優しい人柄がそうした人々を呼び寄せているように感じる。まさに師匠の人生が人情噺そのもののようである。

成功というのは果たして何なのだろうか？テレビや大舞台でもてはやされたくさんのギャラを稼ぐことなのだろうか？もがき苦しみながらも、芸を磨き続け、己の信じた道を静かに追及して行くことも成功のひとつの形かもしれない。

本作は名人芸と言われる桂福団治の人情噺を生で聞いてみたいと思わせる映画であった。

『ぼくは明日、昨日のきみとデートする』

西松　優　日本映画研究者

監督　三木孝浩
脚本　吉田智子
出演　福士蒼汰、小松菜奈、東出昌大
２０１６年　東宝　１１１分

この映画に恋をしてしまった。私の失ってしまった〝ときめき〟を呼び戻してくれた。三木孝浩監督の現代版「純愛映画」の秀作だ。この作品は二十歳同士の美大生南山高寿（福士蒼汰）と専門学校生福寿愛美（小松菜奈）の三十日間の切

ない恋の物語である。

前半は、真面目で純情な大学生高寿が電車の中で愛美に〝一目惚れ〟し、意を決して声をかけ二人の距離を少しずつ縮めていく姿を高寿側から描く。高寿の心の逡巡と高鳴る胸の鼓動まで聞こえてきそうで見る者はドキドキしてしまう。ここでは、高寿の心の声やアップショットが効果的に使われる。後半に、二人は三十日間しか会えないことが明かされる。二人を引き裂くのは昔のような難病や親の反対ではなく不可抗力な運命だ。このわかりにくい運命をどう観客に理解してもらうかが肝だ。その伏線を所々に潜ませ徐々に意識させながら、愛実に告白させるので観客は違和感なく理解できる。そのため、絶望の淵に立たされた高寿が愛実の何層倍の辛さに気づき、〝限られた時間〟を二人で精一杯生きようと決意する過程が観客に共感を持って受け入れられる。並みの映画ではここで失速しただろう。

最後の日に愛美の姿を残したいと肖像画を描く高寿の姿には切なさが滲む。二人で育んできた愛を形で残そうとする感動的な場面だが、ここはあくまで抑制的だ。原作にはないが、五年後に高寿が初めて見せるその肖像画は、描かれた愛美の笑顔が本当に幸せそうだ。ここは遠景から絵に近接していくが、穏やかだが〝熱い二人の思い〟を一点に凝縮させながら、時を超えた永遠の愛に昇華させる見ごたえのあるシーンになった。ラストの愛美の視線は印象的で、愛おしい余韻と共に二人の〝みらい〟が見えた。

大半が二人だけの場面だが、清楚な雰囲気の着こなしとアップが映える表情豊かな小松、真面目で朴訥な青年を好演する福士、現代とレトロの融合した京都の町の佇まいがこの映画を下支えする。「あの、また会えるかな？」「また、会えるよ。またね」。幸せそうな二人にもう一度映画の中で会ってみたくなった。

『眠り姫』

井上静夫　同人誌主宰

２００７年　チャームポイント　８０分
監督　七里圭
脚本　七里圭
出演　つぐみ、西島秀俊

もう観る機会はないと諦めていた映画が、サラウンドリマスター版として帰ってきた。七里圭監督作品の『眠り姫』……と言っても知る人の少ない、異色の映画である。どこが異

色かというと、ほとんど人が出てこない。もちろん動物ドキュメンタリーなんかではなく、れっきとした劇映画である。これは人が姿を見せないのに人の気配が漂ってくる、いわば気配の映画である。

夜の闇にほのかに浮かび上がる樹々と空。カメラが樹々の声に耳を澄ますようにじっと佇み、それらを映し出していく。静謐な時間が流れ、微かに光が射してきて、青白い朝が来る。樹々が徐々に目覚め始める。夜から夜明けにわたって樹々と空を静かに見据えるこのファーストシーンに凝縮される濃密な気配。これはその濃密な気配の中で孤独に震えながら観る映画なのかもしれない。

青地という女教師は、いくら寝ても寝足りないといい、現実感のない、空っぽの風景の中に生きている。女のつぶやくようなナレーションが流れ、職員室、女の部屋、電車の中、車のサイドミラーといったディテールが映し出され、滑らかなオブジェのようにありふれたものを見慣れないもののように変えていく。青地という女が見る閉じた世界だ。日常の風景と声だけの映像なのに、張りつめた空気のざわめきが喚起され、ありふれた心象風景をとらえて、見えないものを見ているような不思議な感覚にさせられる。

男が訪ねてくる。体を重ね合わせると、灰皿に置かれた吸いかけの煙草がポトリと落下する、繊細かつエロティックなシーンだ。と同時に人の存在というものを否応なく意識させられる。しかし、映像はずっと不在であり続ける。そして不在であるのに人の気配がますます充満してくる。それは濃密な空気と人の痕跡としての気配である。女が見ているのは夢なのか現実なのか。すべてが希薄で、夢と現のあわいに生きているようにもみえる。見えないものが見えてきて、見えているものがぼんやり霞んでいく。リアルとは何か。映画とは何か。ふと思う。

この映画は、耳を澄まし、目を凝らして観なければならない。すると映画空間の中、日常という現実を超え、時空も超え、気配という異空間に彷徨って、浮遊する映像体験を得る。そうして映画を観ながら気配から想像世界へと移行し、存在を意識する瞬間を感じ取ることになる。

「この空の花-長岡花火物語」

村上　暁　スタッフ

２０１２年　ＰＳＣ　ＴＭエンタテイメント　１６０分
監督　大林宣彦
脚本　長谷川孝治、大林宣彦
出演　松雪泰子、高島政宏、猪股南

今号の特集「私が選んだ日本映画ベスト３」を選ぶため、僕は大林宣彦監督の映画を何本か見返した。大林作品から選んだのは「この空の花-長岡花火物語」。東日本大震災があった２０１２年公開作品。タイトルの通り新潟県長岡市が舞台となっている。

九州出身の新聞記者玲子(松雪泰子)が、かつての恋人で現在は長岡で高校教師をしている片岡(高嶋政宏)から手紙をもらったことをきっかけに、物語は始まる。

「教え子たちが作った演劇を見るために、俺の古里を訪ねてこないか。長岡の花火の夜、演じられる。この花火もまた見てほしい。長岡の空襲で死んだ人たちへの追悼の花火、祈りの花火なんだ」

演劇の脚本を書く高校生　元木花を演じるのは、猪俣南。なんと元一輪車世界チャンピオン。一輪車に乗りながら演技をする姿は、不思議ながらも印象的で素敵だ。

玲子は、花火大会や舞台の取材をする中で、長岡の人々の話を聞く。登場人物たちは、カメラをまともに見据えて様々なことを語る。セリフが多い。しかも、そのセリフのうちポイントとなる言葉が字幕で出る。資料的な画面も多く挿入される。最初は戸惑うが、説明臭さは全く感じない。過去・現在の人が入り混じる不思議な光景、役者の確かな演技、美しい風景・音楽、そして何よりも時々登場する一輪車集団(２０人以上！)によって、抒情的な映画の世界に引き込まれる。

空襲の被災者が語る記憶。それが舞台へとつながっていく。空襲を受けた人々の声を、花をはじめとする高校生たちが舞台上で表現する。舞台上で繰り広げられる悲惨な光景。この世の終わりのような地獄絵図。

クライマックス、高校生たちの叫びが胸に突き刺さる。「まだ戦争には間に合いますか」。

大林監督の作る映画は、伝わってくる。単にきれいな景色を使った映画にするだけでなく、そこに生きる人々が伝えたいことを、映画に乗せて伝えてくれる。我々日本人が知らないこと、知らなければならないこと、未来へ語り継がなければならないこと。

最近、映画と町おこしが関連して語られることがよくある。映画のロケ地に観光客が集まり、経済的に潤うっていう寸法だ。

ただ、「地方への経済効果を求めて映画を作る」のと、「伝えたいことがあるから映画を作る」のでは、まったく出来上がる映画が違ってくると思う。

昨年、三重県で作られた映画が公開された。僕も地元民として楽しみにしていたので、映画館へ見に行った。ストーリーや出演者の演技は良かったのだが、途中で全く意味のない無駄なシーンが二つもあって愕然とした。一つは現役の知事が登場して挨拶するシーン、もう一つはロケ地のレストランで、そこの店員が自慢の料理を紹介するシーンだ。このシーンが映し出された時、客席がざわついた。それまで物語に集中していたのに、突然異質なものが映ったことによって、観客の集中力が途切れてしまった。

三重県知事の知名度を上げるため、店の自慢の料理を見てもらうため、このようなシーンを入れたのであれば言語道断だ。映画をなめている。「この空の花」には市長が登場する。もちろん役者(村田雄浩)が演じる市長だ。直前の集中豪雨の影響で、花火大会開催が危ぶまれる。中止か決行か、市長が決断する。この市長の決断は、長岡の花火が何を意味するのかを雄弁に伝えている。２時間４０分の長い映画だが、意味のない無駄なシーンは１秒もない。すべて監督が伝えたいことだ。

伝えたいことを伝える、映画はそこからスタートすべきであると思う。